

音楽アイデンティティを考える

宮島 幸子

校歌はコミュニティ・ソングとして学校行事などでうたわれている。しかし、外国には日本という校歌に相当する歌はないようである。したがって日本独自の文化といえる校歌がなぜ誕生し、人々にどんな役割を果たしているのだろうか。校歌を歌うこと、校歌を思い出すことにどんな意味を見出すことができるのだろうか。校歌のルーツを辿りながらそこに内在するアイデンティティの形成について考察した。

キーワード：校歌、コミュニティ・ソング、帰属意識、アイデンティティ

1. はじめに

マスメディアの発達にともないどんな場所でも音楽が溢れている昨今である。多感な年齢である多くの青年たちは、「音楽はなくてはならない大切なもの」として音楽の存在意義を位置づけている。しかし、今回のテーマである学校で歌った「校歌」はポピュラー音楽のように「好きな音楽」として共有、共感、感動というキーワードで直に青年の音楽嗜好に顕著に迎え入れられる音楽ではない。校歌は音楽辞典にも載っていない音楽¹⁾であるが、どこの学校にも「校歌」はあるのが当たり前と誰しもが思っている。全国の校歌の総数ははっきりしたデータでは示されていないが、民謡の数より多いと言われて²⁾いる。それだけ多くの校歌があり、その学校に通った児童や生徒は校歌を歌って卒業している。いわば日本人はみんな自分の校歌を持っているということになる。その校歌、誕生から現在に至るまでの変遷をたどりながら、校歌を歌ってその学校を卒業した児童や生徒が、校歌をその学校独自の「オリジナリティーあふれる

音楽」として自分自身と重ね合わせて受け入れているのだろうか。フィールド・ワークおよびアンケートのデータを基に校歌が個人個人のアイデンティティの形成にどのように影響しているのかを考察する。

2. 校歌の歴史

明治5年、欧米の教育システムを取り入れた近代教育制度が導入された。その中で唱歌教育は指導者の養成や設備が整うまで時間を要し、全国の学校で音楽教育としての環境が整ったのは明治30年ごろになってからと思われる。唱歌教育が全国に広がりつつある明治26年『祝日大祭日儀式用唱歌』が出版された。明治29年には『学校必要唱歌集』が出版され、この中に「校歌」という曲目が載っている。校歌という言葉がいつごろから使われ始めたかは定かでないが、初期の校歌は「学校の歌」としてナショナリズム的要素を持ち合わせた歌詞であった。それは校歌が単に学校の歌であるという以上に、国家体制とのかかわりの中で位置づけられていたことを意味していると考えられる。しかし、『学校必

要唱歌集』がどれくらいの学校で使用され、児童に歌われたのかは疑問である。筆者が調べたところでは明治26年制定の東京市忍岡小学校校歌が最も古い校歌である。教科書的な出版物に載っているような既成の校歌ではないものの、同じくナショナリズムの要素を持ち合わせた歌詞である。一番古い校歌と言われている東京女子師範学校の「みがかずば」は明治11年昭憲皇后が作られ宮内省雅楽課の東儀季熙が作曲したもののだが、35年の時を経て大正2年『尋常小学唱歌』5年生用に載り全国の児童に歌われるようになった。このことは、大正初期に至るまでも校歌が国家イデオロギーとの関わりに大きな役割を果たしたということになるのではなかろうか。校歌が国語辞典に載ったのは大正10年大倉書店発行『改修言泉』で「その学校の校風を挙げたる唱歌」³⁾と記述されていた。この頃から現在の校歌の概念が確立され始めたと言える。

3. アイデンティティとは

心理学者、エリクソン・E. Hは「自我同一性」(ego identity)という概念を提唱した。「自我同一性」とは、一つには「自分は他の誰でもない独自の存在である」という感覚、二つには時間や場所が変化し社会状況が変わっても「わたしはわたしである」といえる一貫性と連続性、そして、三つには自分が生きている社会を認め、そこから認められるような価値観や行動を身につけていこうとする態度(社会へのかかわり)である。すなわち、社会的なつながりと将来への期待を含めた生き方の自覚であり、意思決定である。これができた時、「自我同一性」が確立されたといえるのである。

しかし、この「自我同一性」も固定的なものではなく、成人するまでの発達過程においても

何度となく再検討され、作り直されていくものである⁴⁾と述べている。

アイデンティティは今を生きる人々と社会の繋がりの中で醸成されていくもので、相互に作用しながら常に進化し、また変化していくものである。人は一つのアイデンティティだけで形成されているのではなく、複数のアイデンティティを所有し、それぞれのアイデンティティが他者との相互作用の中で混ざり合いながら発達していくのではないかと考えられている。

子供の社会的アイデンティティは家庭環境によって形成される。就学すると主に学校という「場」で同じような年齢、同じような能力の仲間集団のなかで、他者と比較しながら、自己理解と自他理解の両方に影響を及ぼしながら形成されていく。そして小学校から中学校へと上級していくと学校制度の変化も子供たちのアイデンティティの発達に影響を与えていく⁵⁾。

このようなアイデンティティの発達過程において、日本独自の学校文化といえる「校歌」を学校行事の度にいくどとなく歌った体験は、児童や生徒たちの心にどのように残っているのだろうか。

校歌をエリクソンが提唱した3つの「自我同一性」の概念にあてはめることができる。特に2つめの概念である時間や場所が変化し社会状況が変わっても「わたしはわたしである」といえる一貫性と連続性を醸成される際、校歌が役割を果たしていると考えられる。

4. 校歌から連想するもの

小・中・大学生・社会人に校歌からなにを連想するか、自由記述方式で尋ねた。

小学生の回答を「学校」「地域」「風景」「友達・思い出」「歴史」「校歌」「その他」7つのカ

テゴリーに分けてまとめることができた。18小学校、2257人の児童が校歌から連想するものは上記7分類に納まる範囲にあり、校歌が与えるイメージは地域や学校差はあまりみられない。

表1に示すように小学生全体でみると、校歌から連想するものは、身近にある風景が51%と半数を占めている。小学生は、歌詞に詠まれている地名を連想しているが、中学生になると

風景にまつわる「季節」の移り変わりや「夕日」「朝日」「なつかしいような」と時間的空間を捉え連想している。大学生になると「地元の」「田舎」「土地の」「風土の気候」と親元を離れ現在住んでいる場所から自分が通った学校周辺の景色を思い浮かべ「桜」「白ゆり」「砂浜」「鳩」と具体的であるが、同時に象徴的な連想になっている。また「昔の懐かしい風景」「自分が住んで

表1 校歌からの連想のカテゴリー別比率

	学校	地域	風景	友達・思い出	歴史	校歌	その他
能登川南小	36	2	32	1	3	0	25
高宮小	12	5	39	0	77	10	15
蒲生西小	4	8	11	0	33	8	4
水口小	53	13	481	4	65	17	0
布引小	37	0	10	2	0	0	4
南比都佐小	25	1	52	2	3	6	3
日野小	79	0	86	18	0	2	16
必佐小	14	0	41	3	0	0	14
桜谷小	56	1	46	20	0	11	13
螢池小	36	0	39	4	0	1	5
刀根山小	19	0	9	1	0	0	2
因北小	39	3	49	5	0	2	6
三庄小	12	18	31	1	0	3	2
重井小	23	23	75	3	0	1	4
大浜小	0	6	14	2	0	0	0
田熊小	54	2	47	8	0	18	14
土生小	11	16	69	0	0	20	7
東生口小	5	0	12	1	3	2	7

滋賀県	316	30	798	50	181	54	94
大阪府	55	0	48	5	0	1	7
広島県	144	68	297	20	3	46	40
小計	515	98	1143	75	184	101	141
%	23%	4%	51%	3%	8%	4%	6%

滋賀県	21%	2%	52%	3%	12%	4%	6%
大阪府	47%	0%	41%	4%	0%	1%	6%
広島県	23%	11%	48%	3%	0%	7%	6%

いた所」「ふるさと」と過去として捉えている。

校歌には学校周辺の山、川が歌われ学校と自分達の住んでいる環境を視覚的に捉えている。家から学校までの通学の道々は四季の移り変わりと共に日々変化をする様を、身体で感じながら自然を学んでいく。校歌にはその風景と移りゆく季節がうたわれ、それらが協働して日々の体験が「原風景」になるプロセスなのであろうと思われる。

次に現在通っている学校名、学校という名詞が多くを占めていた。

しかし、中学生になると単なる「学校」ではなく「学校のシンボル」「学校の歴史」「学校紹介」「伝統」と校歌の存在意味に繋がる回答になり小学生とは異なり連想にも幅が出てきている。

大学生になると、中学生が連想した「学校のシンボル」から「学校の象徴」という表現になり「中学校の校風」という学校の特色におよぶ連想もある。また、「同級生」「同窓会」「友情」「自分の幼かった日々」という小学生や中学生にはない連想も加わって、コミュニティの成員である、ないしは、あったことを意識した回答になってきている。

また、「学校」に分類したなかには「入学式」「卒業式」「体育館」の連想が多くみられ、「入学式」「卒業式」は学校における大事なセレモニーであり、そのセレモニーが行われる場が「体育館」である。連想は体験したことと結びついている。

以上のように、校歌は学校というコミュニティを離れ、そこを起点として顧みるという時間的事後性をもつもの、すなわちタイムラグが校歌の存在意義をあらためて考えさせてくれると思われる。

校歌は個々人の心の原風景となり時間や場所

が変化し社会状況が変わっても「わたしはわたしである」といえる一貫性と連続性を醸成していく力を持っていると言える。

5. 学校文化における校歌の役割

殆どの学校長は「校歌を歌わすこと」に郷土愛、学校愛を育むためと意識して歌わせているわけではない。不可視的であるが大きな浸透力をもって自然に教育されるものとして捉えている。また、一般論として歌は人心を1つにする力があるとも考えている。

反面、「校歌は帰属意識を養うもの」「校歌は郷土愛を育んでいく歌」「母校の象徴」「原風景」「連帯感を養うもの」ときっぱり言う学校長もいる。

児童にとって学校長は接する機会も少なく、儀式や行事の時話しをする人という印象があり、児童に「先生の名前を知っているか？」と尋ねても6年生までも「知らない。校長先生」と答える。学校長も「シンボライズされていて校歌とよく似ている。」と、自分の立場を表現する。

また、自分自身を振り返った時、「中・高・大学と校歌があったが、小学校には校歌がなかった。すると視覚的な思い出はあるが、聴覚的な思い出がないという感じがする。」と古巣への回帰の原動力に「聴覚的な思い出」として校歌がその役割を果たすと考えている。

小学校で音楽指導をしている教師は、校歌の指導は特に高学年になると児童が嫌がるので難しいと話す。

「校歌の存在は行事の時のために練習する。だから、普段は歌わない歌が校歌である」また「校歌は式次第の一部、ただの道具であり、取りあえず一番は覚えさせていると行事の時は大丈夫」と考えている。校歌を指導する時は歌詞に

書かれている意味は説明している。

週5日制になり、行事を削らないと時間が足りない状態にあり、益々校歌を練習することも歌う機会も少なくなっている。教師として嫌いな校歌もあり歌わせたくない校歌もあるという。

校歌を指導している教師に「校歌はあった方がいい。受け継がれた方がいいと考えている児童・生徒が多い」とアンケート結果を報告すると「大嫌いなのに信じられない」と現場とのギャップを改めて痛感していた。また、「教えるのがしんどい。残らない」と校歌の本来の存在意義について、校歌を指導している教師と児童の間に大きな隔たりを感じている。

中学校で音楽指導をしている教師は、「歌詞に書かれている風景が教室から見えるので視覚に映る範囲で楽しく指導するように努めている。難しく説明すると気後れして歌わなくなる」また、「歌えるんだけど卒業式の練習さえも歌わない」このような現象から基本的に「生徒は校歌は好きではない」と考えている。

また、中学校の場合、いくつかの小学校から入学してきているから、校歌の話になると「うちの小学校の校歌は・・・」と小学校の校歌を歌い出す場面も見受けられる。

校歌は音楽的には聞かせどころもサビの部分も少なく「面白くない音楽」といえるかもしれない。教科書にのっている曲の方が楽しいのに、過ぎ去った時校歌の方が心に残っている。そういう意味では「不思議な音楽」といえる。

音楽指導する立場としては「学校の歌」として伸び伸び歌って欲しい。校歌が全校生徒と教師が一同に会し歌われるのが卒業式であり、「さようなら」という心を込めて歌われる時だと思います」と話す。

生徒のアンケートには「いつもみんな歌わな

いけど、卒業式にみんなで大きな声で校歌を歌い切ったことが残っているから、校歌はあった方がいい」と答えている。

ある小学校長は校歌の存在意義が知りたかったら卒業式に参加すべきだと中学校を紹介してくれた。そのコミュニティを去る時、校歌のあるべき姿が見えてくるという。上記で「校歌から連想するもの」でも述べたが、校歌は学校というコミュニティを離れ、そこを起点として顧みるという時間的事後性をもつものだから、校歌はその学校を去り、過去形になった時はじめて存在意義がわかる音楽といえる。

6. 意識の二重構造

先にも述べたが、指導教員と児童の間で校歌に対する意識に大きなギャップがみられた。その児童や生徒にアンケートで「校歌は必要であるとおもうか」という質問にたいして「はい」と答えるが、それでは「歌い継がれるべきか」と問われると「いいえ」という答えが返ってくる。その反対の答えもあり、アンビバレント (ambivalent) な想いが浮かび上がる。

「校歌は必要と思われませんか」また「校歌は長く歌い継がれていったほうが良いと思いますか」2つの質問に対して「それは何故か」と理由も含めて大学生・社会人に質問した。

表2にみるように、「校歌は必要と思われませんか」「校歌は長く歌い継がれていったほうが良いと思いますか」の2つの質問に対する答えは大学生の場合、パーセンテージは同じであるが、社会人の場合はその割合が若干異なる。しかしながら、「歌い継がれるべきか」に対する答えについては年令を追うごとに「歌い継ぐべきだ」と答えた人の割合が高くなっている。しかし、2つの質問に対する答えの比率は比例していない。

このことは校歌の存在意義に対する考え方が、両者では基になる考え方に相違があるためであるとおもわれる。

表2 校歌は必要か、歌い継がれるべきか

区分	校歌は必要か		歌い継がれるべきか	
	必要	不要	よいと思う	そう思わない
大学生	83%	17%	83%	17%
10代	97%	3%	94%	3%
20代	91%	9%	78%	19%
30代	91%	8%	79%	21%
40代	93%	4%	87%	13%
50代	91%	7%	85%	14%
60代	95%	5%	89%	11%
70代	91%	9%	88%	12%
80代	100%	0%	100%	0%

一方、「校歌は必要であるが、歌い継がれなくてもいい」また「校歌は不要であるが、歌い継がれるべき」と一見相反する意見を持つ人の割合は表3に示す通りである。まず、大学生の「校歌は必要であるが、歌い継がれなくてもいい」理由として、表4aにみるように、大学生にとって「校歌は必要である」理由として、大きく「学校」と「個人」の問題として分けて考えられている。

表3 校歌の要・不要と歌い継がれるべきか

	社会人	学生
校歌は必要 歌い継がなくてよい	8.1% (42人)	4.9% (68人)
校歌は不要 歌い継ぐべき	0.8% (4人)	4.7% (65人)

学校行事・式で歌うのに、なくてはならない存在であるという「固定概念」をもっている→校歌の特質として象徴、教訓、特徴、個性があるので必要と考え→歌うことで連帯感、愛校心、母

校に誇りが持てる→対外的に野球部、甲子園で歌う時には必要と考えていることが表4からうかがえる。

表4 校歌は必要、歌い継がれなくてもいいと考える人の理由（大学生）

a) 校歌が必要である理由

学校に関する理由	連帯感、行事・式、母校に誇り、個性、特徴、共有、象徴、野球部、甲子園、教訓、愛校心
個人的理由	思い出、懐かしい

b) 歌い継がれなくてもいい理由

校歌自体の問題	歌詞の意味、時代に合ったメロディー、校歌の長さ
歌う意義	覚えても忘れるから、強制、インパクト、学校における校歌の存在意義

反面、校歌は必要であるが、「歌い継がれなくてもいい」理由として、「校歌それ自体の問題」と「歌う意義」の2つの面がある。(表4b)

校歌の受け止め方として、校歌=古臭いという「固定概念」をもっている。音楽的に歌詞やメロディを現代に合った「共感でき、心に響く音楽であった方がいい」、「伝統にこだわらなくとも良い」という意見がある。また「校歌は歌わされる歌」であって、強制という形で受け止められている。

このように、校歌の存在意義について相反する考えをもちながら、同時に「時が経つといいものだと思えるから」、「年をとったらいい思い出となる」、「後で思い出すと懐かしい」と現在を軸に過去から未来を見据えている。

また上記とは反対で、表5a), b) に見るように、「校歌は不要であるが、歌い継がれるべき」理由として、校歌は式・行事で歌うもので、歌

う回数が少ないため、存在意義を感じていない。また、実際に式・行事で歌っていないために必要性を感じていない。先にもふれたが、自分の意志に拘わらず歌わされているという強制観念をもっていることが、不要である理由になっている。校歌は不要であるが、歌い継がれるべきであるという理由として、その学校を卒業したという共通の話題として、先輩後輩の縦の関係がスムーズに保てると考えている。また、懐かしさ、思い出に繋がっていく、と自分史の一頁として捉えられている。

表5 校歌は不要、歌い継がれるべきと考える人の理由（大学生）

a) 校歌は不要と考える理由

学校	歌う頻度少ない、誰も歌わない、校歌に限らなくてもいい、存在価値、強制的
個人	面倒、覚えることがいや、歌う意味

b) 歌い継がれるべきと考える理由

校歌の存在意義	伝統、象徴、時代を超えて歌える、学校の歴史、共有、学校のスローガン、愛校心、文化的意味
歌う意味	懐かしい、思い出、先輩後輩の縦の関係

表6の a), b) に見るように、社会人の「校歌は必要であるが歌い継がれなくてもいい」理由として、「思い出」と答えた人は多く、「・・・として」「・・・残るから」「・・・繋がるから」と生きてきた足跡を残そうと、それに価値をおいている。そして「自分の原点」であると故郷を思い出すのに校歌が「役立っている」と述べている。

「歌い継がれなくてもいい」理由は大学生とほぼ同じ考えである。「校歌は不要であるが、歌い

継がれるべき」と回答した人のうち社会人は4人しかいなかった。理由として、「校歌に固執しなくとも、みんなで歌える歌ならばいい」という理由であった。しかし、「校歌を聞くと小学校を思い出す」と校歌は過去を思い起こしてくれる材料として、また、「伝統、校風として長く続けばよい」「歴史がある」と、学校というその場所が回帰すべき古巣として存続することを願っていると思える。

表6 校歌は必要、歌い継がれなくてもいいと考える人の理由（社会人）

a) 校歌は必要と考える理由

学校	帰属意識、象徴、共有、連帯感、誇り、母校、伝統、地域、歴史、郷土愛、愛校心
個人	懐かしい、励み、心の拠りどころ、故郷を思い出す、卒業した証、思い出

b) 歌い継がれなくてもいい理由

時代に合わせた校歌	歌詞の意味、時代の流れを読み取る、楽しく歌えること、統廃合により学校自体がなくなっていく
歌う意味	在学中のみでよい、必要ではない、忘れる

7. まとめ

なぜ校歌が誕生したのか、明治期という時代的背景を考えながら校歌のルーツを辿ってみたが、上記で述べたように校歌は帰属意識の醸成をキーワードにアイデンティティの形成に大きくかかわってきていることが分かった。人生の岐路に立った時、「自分は何者であるのだろうか」と誰しも一度や二度は思うものではないだろうか。そのような時、過去の通っていた学校

周辺の風景や学校での出来事、自分の周りの人々（両親、兄弟、祖父母、親戚、先生、友達）の存在や関わりなどが、メロディーによって脳裏に浮かんだら、人生に指針を与えてくれるかも知れない。校歌は自ずと自分がわかる、そのような働きを担っているのではないだろうか。

在学中は「うたわされる歌」卒業後は「うたってみたくなる歌」が校歌の役割なのです。そこには自分と向き合っている自分に気が付くことであろう。

引用文献

- 1) 宮島幸子、校歌の文化的役割、大阪音楽大学修士論文、p2～p3、2003年
- 2) 田中健次、日本音楽史、2009年、p262、東京堂出版
- 3) 宮島幸子、校歌の文化的役割、大阪音楽大学修士論文、p4、2003年
- 4) 松原達哉、臨床心理学、2010年、p70、ナツメ社
- 5) レイモンド・マクドナルド/ディビット・ハーグリーブズ/ドロシー・ミエル、音楽アイデンティティ、2011年、p57、北大路書坊